

日持上人の海外布教説と源義経

小此木 敏 明

はじめに

六老僧と呼ばれる日蓮の高弟に日持という人物がいる。他の五人と比べ、その来歴は不明な点が多く、日蓮の七年忌にあたる正応元年（一一八八）に日蓮影像（池上本門寺安置、重要文化財）を造立して以降の消息がはつきりしない。それが中世末ごろから、布教のため蝦夷へ赴いたと言われ始める。近世に入ると朝鮮や中国などに渡海したとされ、その事実確認が行われるようになった。更に近代に入ると、日持は海外布教の第一人者とみなされ、その足跡は一部史実として認識されることになる。

日持については、現在までに多くの研究があるが、中でも佐々木馨氏の論が重要である。佐々木氏は、日持の布教範囲について、日蓮の思想や当時の時代状況を多方面から検証し、奥州津軽まで布教した可能性が高く、蝦夷地にまで赴いたことも状況的にはあり得たであろうとする。また、中世末から近代にいたるまでの日持伝の展開について、多くの資料を示しつつ論じている。その中で、一五二〇年代に咎を犯して渡道した京都本満寺の日尋が、自らの敗者の心情を日持に重ね、日持を「宗門の義経」として描いたと推定し、日尋が蝦夷地での日持の布教を史実化したとする。佐々木氏は、その前提として京都における『義経記』の流布の問題にもふれているが、その後の日持伝の展開の中で、義経入夷説に関して特にふれていない点に疑問が残る。

本稿は、佐々木氏の論に負うところが大きいですが、日持の布教の実否には拘らず、源義経と日持の接点という面から、改めて日持の海外布教説の展開を検証したい。なお、資料の引用に関しては、基本的に新字体にあらため、句読点を補った場合がある。

日持の劇化と義経

はじめに、日持の名がもつとも普及したと思われる近代の例から確認したい。日持の海外布教説が流布した経緯には、やはり日蓮宗の布教活動がある。日蓮宗が北海道で活動するにあたり、日持が他宗に先駆けて蝦夷地へ赴いたというエピソードは積極的に喧伝された。それと同時に、日持の痕跡も調査されることになる。

明治二十四年（一八九一）に北海道に渡り、日持の事蹟を調査・流布させた人物に中村雪堂がいる。調査の成果は、「蓮華阿闍梨日持尊者事蹟」として『日宗新報』五一九号（明治二十七年一月十九日）から、中川春亮が口述筆記する形で連載された。

雪堂の活動として注目されるのは、日持を題材とした演劇の脚本を執筆した点である。明治二十六年（一八九三）一月、その脚本は「日持上人海外弘通の偉業を世人に知らしむる為め」に作成され、十段のうち四段が北海道で上演され好評を得たという。この時の脚本タイトルや内容については不明だが、『日宗新報』七七五号（明治三十四年四月二十八日）

の「雑録」には、雪堂が書いた『日蓮記後日鑑万里の名誉』七段二十章の概要が掲載されている。タイトルに「日持」の文字はないが、その内容は日持が海外布教の壮志を抱いて蝦夷地へ赴き、満州への案内役を得るまでの話となっている。

先の『日宗新報』の記事には、「近日熟練の俳優氏に依託して場に登せて江湖に知らしめんと欲す」とあった。『日蓮記後日鑑』の掲載からおよそ一年半後の明治三十五年（一九〇二）十一月七日、東京の市村座において『日持聖人遠征記』が上演されている。脚本は「中村拙堂原作、梅松、三都三補綴」とある。「拙堂」は「雪堂」のもじりだろう。時期的に考えて『日持聖人遠征記』は『日蓮記後日鑑』の上演を依託した結果、補綴・改題されたものではないか。『日持聖人遠征記』の脚本は未見であるが、当時の『都新聞』には、七幕十六場面の筋書が十二回に分けて掲載されている。それを見る限り、異なる点もあるが、両者の内容は大筋で一致する。

『都新聞』掲載の筋書を見ると、義経の名が出てくる箇所がある。一つは日持を義経の孫としているところ、もう一つは、日持が海外へ布教に向かうことを聞いた奥州の小林良景のせりふで、「聖人の大願こそ判官殿への能き追善」と述べるところである。

『日蓮記後日鑑』の概要を見ても、義経については書かれていない。雪堂は、北海道のある場所で演説した際、北海道の移住開拓の始祖は日持上人だと述べたところ、聴衆の中に義経・弁慶がいると言った者がいたので、「義経弁慶の蝦夷談ハ桃太郎の鬼が島と一般である。小供の昔咄の説明はしません」と答えたという。⁽⁸⁾ 義経を日持の孫とするのは、補綴者が客受けをねらって付け加えた可能性もあるが、まったくの創作というわけではない。

青森と北海道には、それぞれ日持を開山とする広布山蓮華寺と妙光山

法華寺がある。両寺の周辺には、日持を義経の裔とする伝えがあったようだ。『青森市沿革史』の「綱」承応三年甲午、僧日住広布山蓮華寺を開基すの「目」部分に、「筆者注日持は」源九郎義経の孫子に出づると云ふ。本年蝦夷布教を名として来浜せり。其実は先祖義経の旧蹟を弔ふに在りと」とある。⁽⁹⁾ また、『北海道寺院沿革誌』の妙光山法華寺の項には「京都西花門院源藏人行泰の三男幼名松千代（行泰は源義経の裔なりと史不詳）」（括弧内は割注）と記されている。⁽¹⁰⁾ 松千代は日持の幼名である。日持と義経には、蝦夷地から海外へ渡ったという共通の言説がある。そこから、両者を直接結びつけるような発想が生じたのだろう。

小谷部全一郎と日持海外布教説

演劇の例は、義経の知名度を日持の側で利用するものであった。今度は逆に、義経渡満説の側が日持の海外布教説を利用した例を確認したい。小谷部全一郎の『成吉思汗は源義経也』（富士房、一九二四）は当時話題となり、賛否両論の議論を呼んだ書籍として知られるが、「第五章 日本と肅慎及義経大陸に渡る」の中に日持についての記載がある。小谷部は、サガレン州（北樺太）の亜港（アレクサンドロフスク・サハリンスキー）駐屯軍が発行する週報『北星』を引き、日持が開基の永寧寺という日蓮宗寺跡が、「ツイル」というところの小部落にあることを紹介した上で、以下のように述べている。

日持上人は奥州津軽より蝦夷に渡り、更に樺太より大陸に渡りしなり云々と。是等の事実に徴するも、六七百年の昔に於て、既に日本人の多数が今の東部西比利亜に入込み居りしこと昭々として瞭かなり。

小谷部が日持の持ち出したのは、義経＝成吉思汗説を補強することが目的である。小谷部の論法は、義経よりはるか前の時代から大陸と日本には盛んに人の往来があり、日持が布教のために大陸に渡ったこ

ともその証拠の一つである。よって、義経が満州へ渡っていても不思議はない、となる。しかし、この主張を成り立たせるには、少なくとも日持の海外布教がそれなりの信憑性を持って受け入れられていなければならない。

大正期、日持布教の足跡は樺太をめぐる領有権の問題とも関係していた。日本は明治八年（一八七五）の樺太千島交換条約により樺太の領有権を失うが、日露戦争に勝利したことにより樺太の北緯五十度以南を割譲される。その後、日本は北樺太島の領有権をも主張していくことになる。大正十二年（一九二三）、後藤新平はソビエト政府極東代表のヨッフエを日本に招き、北樺太島割譲問題を含む私的な交渉を行った（後藤・ヨッフエ会谈）。後藤は割譲の論拠の一つに日持の海外布教をあげていたことが知られている。⁽¹⁾

当時、日持の海外布教を懐疑的に捉えていた人物も当然いただろうが、それを政治的な目的から史実と捉える風潮が形成されており、小谷部はそれを利用したと言えるだろう。なお、小谷部は後に出版した『義経と満洲』（厚生閣書店、一九三五）の中でも、「日持上人と蒙古」という節を設けて日持の海外布教にふれている。

近世の日持伝承——『本化別頭仏祖統紀』以前

日持を義経と関連づける、あるいは共通点を見出し出しているような言説は、近世にはほとんど見られない。例外として注目したいのは、享保十六年（一七三一）に成立した『本化別頭仏祖統紀』（以下『別頭統紀』）である。これについて述べる前に、まず『別頭統紀』以前に日持の海外布教についてふれている文献を確認したい。日持の目的地や渡海ルートについて、具体的な地名・国名が記されているものはそれもあげた。

(1) 『当家諸門流継図之事』六門徒之事（一五九三〜一六〇三年）⁽²⁾

持聖人ハ俘囚島へ御渡り玉フ

(2) 『童蒙懷覧集』二十七 六老等法流之事（一六三二年）⁽³⁾

志^シ異国之弘通^ニ弘^ニ法ヲ^レ高麗^國⁽⁴⁾

(3) 天正本『本土寺過去帳』高祖大聖人六老僧次第（一五八三〜一七〇七年か）⁽⁵⁾

彼師^{蒙古國}弘通^ニ御出。

(4) 『法華靈場記』冠部 開基略統（一六八六年跋）⁽⁶⁾

欲^テ弘^シ法^ヲ於異域^ニ令^ム渡^ル唐^也

(5) 『桃源遺事』卷五（一七〇一年）⁽⁷⁾

宗旨弘めんが為に、朝鮮國へ渡られ候よし申伝へ候

(6) 『扶桑倫類録』（『祖書証議論』卷一の引用）⁽⁸⁾
有^二入^元之大志^一

(7) 「問」日持上人事跡書 代^レ人（一七一〜一七二五年）⁽⁹⁾

松前より開洋し、北高麗に至り、遂に一寺を建つ。持統山博伝寺と曰ふ

(4) は版本、その他は当時写本で伝わったものとなる。日持の目的地や渡海ルートは共通していない。(1) は「俘囚島」、その他は朝鮮半島と中国大陸であるが、蝦夷地を起点として、時代とともに広がっていったとは限らない。蝦夷を経由して外国へ渡ったとあるのは(7)のみで、その他の例では、渡海ルートが明確に意識されていたわけではない。

義経入夷説が最初に確認できる文献は、寛文十年（一六七〇）に成立した『本朝通鑑』であるが、そこから二十年ほどの空白期間があり、全国的に流布していったのは元禄期（一六八八〜一七〇四）に入ってからのこととされる。日持と義経を関連づけるという発想の前提には、当然、義経入夷説と日持の海外布教説の両方に興味を持つ必要がある。十七世紀から十八世紀初期において、その前提をクリアする者は日蓮宗関係者

の中にも、ほとんどいかなかったと思われるが、徳川光圀と新井白石は数少ない例外である。光圀と白石が日持について知っていたことは(5)と(7)によって確認できる。(5)(7)について、次節でもう少し詳しく見ていくことにする。

徳川光圀と新井白石

光圀については日持と多少の接点がある。日持は海外へ布教に赴く前に駿河の庵原郡松野郷に永精寺を創建していた。永精寺は後に荒廃したが、そのことを嘆いた徳川家康の側室養珠院(お万の方)は、元和四年(一六二八)²⁰に駿府城の北東(有度郡沓谷)に永精寺を移し、名を貞松山蓮永寺とした。養珠院は光圀の祖母に当たる人物である。光圀自身も生母谷久子のため、延宝五年(一六七七)に久昌寺という日蓮宗の寺院を建設している。

光圀の事跡を記した『桃源遺事』巻五には、年代不明の記事ながら以下的一段がある。

一日蓮上人の弟子日持と申僧、宗旨弘めんが為に、朝鮮国へ渡られ候よし申伝へ候、西山公其志を甚だ御感有て、宗対馬守義直へ御頼み、日持の事を朝鮮へ被_レ申越_レ御聞届給はり候様にと御頼み被_レ成候、

光圀が日持のことを朝鮮へ問い合わせるのに仲介を頼んだ宗義真は、明暦三年(一六五七)に家督を継いで対馬守となり、元禄五年(一六九二)に致仕している。「対馬守」とあるのが正しければ、光圀が日持について照会を打診したのは、明暦三年から元禄五年の間ということになる。この頃、光圀は蝦夷地にも関心を持ち、元禄元年(一六九九)には快風丸を派遣している。²¹

白石はどんな切掛けで日持のことを知ったのだろうか。立原翠軒が編

纂した『白石先生遺文』下には、「問」日持上人事跡「書 代_レ人」という書状が収録されている。「代_レ人」とあるので、誰かに代って書いた書状ということだろう。

書状の構成については、前後の挨拶文を除けば、第一に蓮永寺の日圭が送ってきた書状の略述、第二にそれを受けての考察、第三に朝鮮に問い合わせる質問内容となっている。書状の宛先については、「貴邑の朝鮮に於けるや、殆ど密邇為り」「悉く老師の洪陰に頼るのみ」とあることから、朝鮮と密接な関係にあった対馬の僧が有力だろう。代書の依頼人については、白石がその書状を略述している日圭が関係している可能性もあるが、断定はできない。

まず、日圭の出自と、その書状の内容について確認したい。日圭は院号を一心院、字を智境といい、蓮永寺十七世を務めた人物である。生年は不明だが、没年は寛延四年(一七五二)とされる。²²蓮永寺の住職ということで、自身の寺の開山である日持について興味を持ったということだろう。日圭が知る日持の情報によると、日持は正応四年(一二九一)の一月一日に「松前」より渡海し、「北高麗」に至り、「持統山博伝寺」を建てた。命日は十二月七日(蓮永寺では十一月一日に会式を行っている)とするが没年は不明という。これは身延山久遠寺に伝わる説ということだが、持統山博伝寺という具体的な名称の出どころは分からない。ただ、その所在が北高麗ということ、日持の渡海を検証するために、朝鮮についてを求めることになったのだろう。

日圭がまずとった方法は、朝鮮通信使に問い合わせることだった。「前住僧日閑」(蓮永寺十五世。元禄三年、八十一歳没²³)は、天和二年(一六八二)の通信使(綱吉の将軍就任時、正史は尹趾完)に日持のことを書状で問い合わせたとある。この時、光圀も使節に日持のことを尋ねたとあるが、いずれも回答はなかったとされる(先の『桃源遺

事』の記事が通信使に質問する先か後かは不明)。日圭自身も正徳元年(一七二一)の通信使(家宣の將軍就任時、正史は趙泰億)が宝泰寺に滞在しているところを訪問し、「応接百端」したが答書は得られなかったとある。

通信使への質問は空振りに終わったが、日圭は諦めなかったのだろう。白石(もしくは代書の依頼者)のもとに日圭が書状を送ったことがその証明である。日持の海外布教が事実であることを明らかにすることで、日圭や宗派にどのような利点があったのかは分からないが、日圭の探究心によって、白石が日持を知るに至ったことは確かである。

ここで、白石の代書がいつなされたかを考えてみたい。日圭の書状を白石が知ったのは、日圭が正徳元年(一七二一)の朝鮮通信使に日持のことを問い合わせた後のことになる。よって、白石が代書した時期は、正徳元年から白石没年の享保十年(一七二五)の間となる。この間は、白石が蝦夷地に関心をもっていた時期でもある。白石は享保五年(一七二〇)に『蝦夷史』を執筆し、その翌年から水戸藩の安積澹泊と書状の遣り取りをしていたことが知られる(『新安手簡』)。『新安手簡』では、義経入夷説に関する応答も含まれており、加藤謙斎が偽作し『鎌倉実記』巻十七に引いた「金史別本」が偽書であることを看破している⁽²⁶⁾。

光圀や白石が日持を知った時期は、両者が蝦夷地や義経に関心を持った時期と重なる可能性がある。この時、松前には日持を開山とする妙光山法華寺が存在していたが、光圀や白石のもとに松前の日持伝は伝わっていなかった。両者が日持について述べた文献は、ここであげたもの以外には確認できない。日持の海外布教説を知っていた中央の知識人でも、この時点では日持と義経を関連づけるという発想はもたなかったし、そうする必然性もなかったのだろう。

『本化別頭仏祖統紀』と義経

これまで義経と接点を持たなかった日持を義経との関連で語ったのは、すでに述べたように『別頭統紀』である。『別頭統紀』は日蓮をはじめとして、六老僧や諸山の先師、在家信者等四四三名の事蹟を列伝形式で書いた三十八巻目録一卷二十八冊という大部の書で、寛政九年(一七九七)に京都の村上勘兵衛(他二肆)から刊行された⁽²⁸⁾。ただし、序文は享保十五年(一七三〇)に書かれており、日蓮の四五〇年遠忌を期して、享保十六年(一七三二)に脱稿しているが、その後も書き直し作業を行っていたことが指摘されている。著者の日潮(一六七四―一七四八)は字を海首、六牙院と号した。仙台孝勝寺二十三世、飯高檀林化主、身延久遠字三十六世を務めた人物で多くの弟子がいたことで知られる⁽²⁹⁾。

『別頭統紀』に至り、日持伝はいまままでの簡潔なものから物語化が進み、日持が異国へ布教に赴く際の決意も、日持の口から語られるようになる。しかし、義経と日持の接点に関しては日持伝ではなく、別の人物に関する記述に見られる。「松前妙光山法華寺中興日尋上人伝」には次のようにある。

師諱は日尋、久遠院と号す。長安城下の産にして本満寺板首の僧なり。奥州松前の邑は元宇賀浦と名づけ、千島と呼ぶ。(一)文治五年(一一八九)己酉、源廷尉義経、高館の乱を避け是の地に来り、初めて之を聞く。永仁三年(一二九五)乙未、吾が蓮華阿闍梨日持尊者、異域を救済し夷狄を教化し、晩に宇賀島に到り、箒を結び滅を示す。土民徳に懐き、其の身骨を竝り、礼を以て之を崇め、塔を法華と呼ぶ。永正十一年(一一五十四)甲戌、宇賀の城主源朝臣武田光広、地を易め称を更め、始めて松前と呼ぶ。武威直諒の人、皆徳に

婦し、連櫓万艘、坐ながらにして天錫を享く。大永元年（一二二一）辛巳、寺の壇越小林氏良景、法華塔を今の地に移す。師遙に之を聞き、来りて其の志を資け、之に居ること数年、仏殿・僧房、漸くにして相ひ整へ、勝して妙光山法華寺と呼び、持尊を開祖と為す（²）持尊の事、迹た異説多し。今日窓の記に依る）。衆、師の勲功を喜びて推して中興の祖と称す。享祿元年（一二二八）戊子の春、偶微恙を感じ、五月十八日、泊然として化す。（原漢文、へ）内割注）

日尋は松前の妙光山法華寺を再興した人物である。傍線部（1）にあるように、「日尋上人伝」では、松前を開闢したのは義経であり、日持はその後を受けて松前に入ったことになる。日尋伝に見られる日持の宇賀島（松前）死亡説などは、傍線部（2）にあるように「日窓の記」によったものだろう。

この日窓の伝も『別頭統紀』に見られる。日窓（一七〇二）は松前の出身で、法華寺十四世となり、日尋に続き法華寺を「修補一新」した人物である。「日窓上人伝」では、法華寺の前身である日持の法華塔があった旧地から、日持が所持していた霊像とも目される日蓮像が掘り出される。その像は、「殿外に歩を為して読誦唱題」し、「化童子と為り人の吉凶を告ぐ」といった霊験をなしたとする。そのことに感嘆した日窓は、詳しく記録してそれを伝えた。日窓はその記録を読む機会を得たところである。

日潮は、各寺から種々の記録を集め『別頭統紀』を編纂したと思われる。松前を義経が開闢し、日持・日尋がそれに続いたという叙述は、日窓の記録によるのか日潮の独創かは判然としないが、日潮が義経生存説を意識していたことは間違いない。それは、『別頭統紀』に載る「通別一覽志」（巻三十六〜三十八）に明瞭である。「通別一覽志」は、冒頭に「頼朝の霸道を通と為し、吾高祖の化導を別と為し、通別一覽の志を造

す」とあるように、元暦元年の範頼・義経が木曾義仲を討った記述から始まり、享保十六年（一七三一）の日蓮四百五十年忌で終わる宗門の年表のようなものである。その中の文治五年（一一八九）の記事には、「源廷尉義経剣に伏す」と記したのちに以下の文章を載せる。

義経実は死せず。名を義行と更め、又義顕と更め、外国に走る。按ずるに『金史別本列将伝』曰く、範車国の大将軍源光録義鎮は、日本の陸華山権冠者義行の子なり（按ず、義経羽州亀割坂に亀若を生ず。即ち義鎮なり）。始め新鞞鞞部に入り、千戸の判事と為る。身の長六尺七寸、性温和にして勇猛、才思諸部に甲たり。外夷多く随ふ。扨して字館に入り、礼儀を辯ず。後に咸京録事に遷る。章帝、詔して光録大夫に転ず。累りに大將軍に任ず。久しく範車城を守り北方を押す。往昔、権冠は東小洋の藩君なり。章帝、顧厚し総軍曹事の官に定め、北鉦に入らしむ。日を不さず蘇敵を印府に破る。翻り来り幕下に属し、範車を築きて護る。比北天を侵し、龍海を渡り、一つの島を得る。山川麗奇にして悉く金玉なり。民、靈草を煎することを知りて、少しく五穀を食ふ。生肉を屠ふるを甚だ嫌ふ。故に邪類無く、老仙伊香保の行辰、本命を行ふ。儀相異恠無し。徳故人に勝り、義行帰趣尊敬し、後中華に遊びて、隠頭更に定まらず（已上）。（原漢文、へ）内割注）

「金史別本列将伝曰く」以下は、加藤謙斎の『鎌倉実記』巻十七に引かれていた「金史別本」とほぼ同文である。すでに述べたように、「金史別本」は謙斎が作成した架空の書で、多方面に影響を与えたことで知られる。³⁰『鎌倉実記』の記述と比較すると、傍線部の割注がない他、脱字が多く、一部意味がとりにくくなっている。あるいは、『鎌倉実記』からの直接の引用ではないかもしれないが、これを「通別一覽志」に収録した意図は、冒頭の「義経実は死せず」が端的に物語っている。当然、

先の日尋伝の記述とも関連付けて考えるべきだろう。ちなみに、「通別一覽志」では、日持は永仁三年（一二九五）に「入唐弘宗す」とある。

『別頭統紀』が一旦の完成を見た二年後の享保十八年（一七三三）、日達の『鷹峰群譚』五巻五冊が京都の並河甚三郎・八木八郎兵衛から刊行されている。その内容は、日達が鷹峰（京都市北区の一地区）の庵室止足軒において、仏教や儒教、中国や日本などの諸問題について談論したもので、全一八一章となっている。著者の日達（一六七四〜一七四七）は、福島県岩代出身で、享保五年（一七二〇）に本圀寺二十六世となり、同十三年（一七二八）に鷹峰の止足軒に隠栖した。

この『鷹峰群譚』も日持伝と義経関連話を収める点で『別頭統紀』と共通するが、日持の蝦夷入りに関してまったく関心を払っていない。『鷹峰群譚』には日持の渡海について以下のように述べている。

正和（或るいは伝く、正応）四年正月朔日、孤影飄然として旧き草廬を出で、直ちに鎮西に赴き、商船に附して溟渤に泛かぶ。後其の止まる所を知らず。嗟呼、曠大高明の志、良に景慕すべし。是れを以て師の入滅の歲月、更に知る者無し。（原漢文。へへ内割注）

傍線部にあるように、渡海の方法を鎮西から商船に乗ったとしている点が目される。³³日達は、日持が松前へ向かったという説を知らなかったのだろうか。『鷹峰群譚』巻五は、義経に関連する話として「義経冤死す」「義経蝦夷に逃る」という話を載せている。後者については、「弁慶之崎」の奥に、「御嘉茂威」と呼ばれる石柱山が海中より屹立しており、船の難所となっているという話である。日達は、蝦夷人が義経を「嘉茂威」と呼ぶので、「御嘉茂威」と呼ばれる石柱山は義経を祭ったものではないかと述べ、「世に伝ふ、義経実に奥州に死せず、潜かに蝦夷に通ると。亦た妄説ならずとなり」として話を結んでいる。「御嘉茂威」の話は日達に教えたのは、もと能登国の人で、松前に四十有余年住んでおり、最

近日達の草庵にやってきて出家した人だという。もし、松前に日持が赴いたことが周知のことであれば、日達の耳にもその情報が自然と入っていたと考えるのが自然ではないか。

義経入夷説は、元禄期（二六八八〜一七〇四）を経て享保期（一七一六〜一七三六）に義経蝦夷渡り説の骨格が作られたとされる。³⁴『別頭統紀』『鷹峰群譚』の成立時期は、その享保期に完全に合致しており、両者ともに義経入夷説の影響下にあったことが分かる。³⁵しかし、『別頭統紀』のみが、蝦夷開闢のはじめに義経を位置づけ、日持をそれに続くものという認識を示したことになる。

おわりに

明治に入り、日持の海外布教説は日蓮宗の布教活動の一環として劇化され、『日持聖人遠征記』が東京の市村座で上演された。劇中では、日持が義経の孫とされ、その海外布教の志は義経への追善と位置づけられた。義経の知名度を日持の側が利用した形である。一方、近代帝国主義下の日本では、樺太をめぐる領土問題などの政治的要因が絡み、日持の足跡は日本の領有権を主張する根拠にも用いられた。小谷部全一郎の『成吉思汗は源義経也』は、義経渡満説の根拠の一つとして日持の海外布教を持ち出している。これは、日持の足跡がある程度史実として定着していたことの表れである。

日持と義経に関する言説が接点を持つためには、両者について関心を持っていなければならない。徳川光圀や新井白石はその条件を有する数少ない人物であったが、二人が義経と日持を結びつけて考察しているような言説は確認できない。

両者に接点を見出したのは、日潮の『別頭統紀』である。『別頭統紀』には、松前を開闢したのが義経であり、日持はそれに続いたという認識

が示されている。また、同書の「通別一覽志」には、『鎌倉実記』に引かれた「金史別本」を引用する形で義経の生存説が主張されている。『別頭統紀』は義経入夷説が流布し、渡満説へと発展した享保期に成立しており、義経入夷説の影響下にあったと言える。『別頭統紀』のこうした認識が明治・大正期に入り、両者を関連させる遠因となったと言えるだろう。

注

- (1) 主な著作に、佐野前励『蓮華阿闍梨日持上人』(長運寺、一九一一)。三上義撤『国土日持上人』(政教公論社、一九一九)。柿花啓正『神洲の精華日持聖人海外遺跡探險記』(二松堂書店、一九一九)。中里右吉郎『蓮華阿闍梨日持上人大陸踏破事蹟』(蓮永寺、一九二六)。高鍋日統『聖雄日持と豊太閤』(大日本建国史学会、一九四二)。景山堯雄『仏教海外伝道の始祖 日持上人伝』(みのぶ教学財団、一九五二)。前嶋信次『日持上人の大陸渡航—宣化出土遺物を中心として』(蓮永寺、一九七二)、同タイトルで誠文堂新光社から一九八三年にも出版。高橋智暹『日持上人研究』(獅子王学会、一九七五)。
- (2) 佐々木馨「日持伝の史的考察—謎の海外伝道者」、日本海地域史研究会編『日本海地域史研究』第七輯(文献出版、一九八五)所収による。その他、佐々木氏の日持関係の論に、「謎の海外伝道者—日蓮宗日持」『北方伝説の誕生』(吉川弘文館、二〇〇七)。「日持伝と北海道開教」、松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学史の諸問題』(山喜房佛書林、二〇一四)がある。
- (3) 明治二十七年は、日持の六五〇年遠忌にあたりとされ、複数の催しが行われたことが宗門報道誌であった『日宗新報』で確認できる。
- (4) 『日宗新報』五二六号(明治二十七年四月五日)の「日持上人事蹟演劇脚本」(「雑報」内)による。これとは別に福原敬太郎氏は、「源義経と僧日持」(『歴史公論』三巻六号 頼朝・義経号、一九三四・六)の中で、明治二十四・五年頃、北海道の大和座において上演された狂言について、中村雪堂が日持の蝦夷地渡海について「親しく調査しものを土台に、篠田佐七と云った狂言作者が、彼の「白縫譚」などの筋を取入れ、脚色」したものと述べている。おそらく『日宗新報』と同じ舞台の話だろう。年については記憶違いか。
- (5) 『歌舞伎』三十一号(明治三十五年十二月一日)の「歌舞伎日記」中の「脚本」による。上演日については同「興行一覽」による。
- (6) 「新狂言筋書 市村座一場面 海外布教日持聖人遠征記」(『都新聞』五三六九〜五三八五号、明治三十五年十一月一日〜十一月二十一日)。
- (7) 『都新聞』五三七三三号(明治三十五年十一月七日)。
- (8) 中村雪堂述・中川春亮記「蓮華阿闍梨日持尊者事蹟(承前)」(『日宗新報』五二四号、明治二十七年三月十五日)。
- (9) 『青森市沿革史』上(青森市市史編纂係、一九〇九)。
- (10) 星野和太郎編『北海道寺院沿革誌』(時習館・聚文堂、一八九四)。「祖書証議論」にも「持師ノ猶父ハ西花門院ノ藏人源ノ行易ナリ」とする説がある。
- (11) 鶴見祐輔《決定版》正伝・後藤新平 七(藤原書店、二〇〇六)、中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』(国書刊行会、一九七六)参照。後藤新平については、昭和三年(一九二八)にも「日持上人が日本に於ける海外布教の先達で上人の伝記に依つてのみ日本が樺太カムチャッカ等の所有を主張する根拠がある」として、日持上人を偲ぶ席を設けている(『中外日報』昭和三年六月二日、「開教の先達」日

持」を偲ぶ)。

- (12) 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』十八史伝旧記部 一(山喜房仏書林、一九六八)所収。成立年は同全集の「例言」による。
- (13) 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』七法華宗部(山喜房仏書林、一九六八)。
- (14) 『千葉県史料中世篇本土寺過去帳』(千葉県、一九八二)。同書の解説によると、十四世紀後期の成立と考えられるが、天正十一年(一五八三)に書写され、宝永四年(一七〇七)まで書き継ぎが行われた。明暦二年(一六五六)にも写本がつくられており、宝永四年以降は、明暦本への書き継ぎがなされるようになる。日持の記述は、天正本のみに見られるが、成立段階からあったのかは不明。
- (15) 『法華霊場記』六卷・冠部一卷十冊、文政六年(一八二二)、大阪河内屋長兵衛刊。立正大学品川図書館蔵(A06/115・144)。
- (16) 国書刊行会編『続々群書類従』三史伝部(国書刊行会、一九〇六)所収。
- (17) 『祖書証議論』、立正大学品川図書館大正六年写本(D0/354・413)。日通(一七〇二-一七七六)の『祖書証議論』卷一に「倫類録」として引用が見られる。「倫類録」は、「問日持上人事跡」書が引く「扶桑倫類録」と同一の書と思われる。
- (18) 『白石先生遺文』下、板倉勝明編『甘雨亭叢書』七、安政三年(一八五六)刊に所収。原漢文。
- (19) 菊池勇夫「義経『蝦夷征伐』物語の生誕と機能―義経入夷伝説批判」(『史苑』四十二卷一・二号、一九八二・五)。
- (20) 加藤鞞負「なおりその記」中卷(静岡県郷土研究会、一九二八)に「再建の事を許し玉ひしは、元和元年にして、再建の事をへしは元和四

年といふ」とある。

- (21) 「宗対馬守義直」とあるのは、「義真」の誤りとみて訂正した。
- (22) 『国史大辞典』八(吉川弘文館、一九八七)の「宗義真」(荒野泰典)の項目参照。
- (23) 岩崎克己「義経入夷渡満説書誌」(一九三三、岩崎克己)、「快風丸渉海紀事」参照。
- (24) 『日蓮宗事典』(日蓮宗宗務院、一九八二)の貞松山蓮永寺歴世を参照。
- (25) 前掲注二十四に同じ。
- (26) 金田一京助「英雄不死伝説の見地から」『アイヌ文化志』(三省堂、一九六一)、初出は『中央史壇』十ノ二(一九二五・一)。荒川久壽男「澹泊と白石―新安手簡年次考」(『皇学館大学紀要』十九、一九八一・一)を参照。
- (27) 松前藩の史料を集大成した『福山秘府』寺院本末部卷之十三によると、法華寺は大永元年(一五二二)の建立で、承応年中(一六五二-一六五五)に再興されている。『新撰北海道史』第五卷 史料一(北海道庁、一九三七)参照。
- (28) 以下、『本化別頭仏祖統紀』の引用は、立正大学品川図書館蔵(A06/140)の寛政九年版を用いる。
- (29) 冠賢「六牙院日潮上人遺芳」(潮師法縁東京支部、二〇〇五)参照。
- (30) 前掲注二十六金田一論文。
- (31) 山本勇夫編『高僧名著全集』十四「元政上人篇・日達上人篇」(平凡社、一九三二)、『鷹峰群譚』の解説参照。
- (32) 以下、『鷹峰群譚』の引用は、立正大学品川図書館蔵(A04/124)「享保十八年(一七三三)版を用いる。
- (33) 佐々木氏は、前掲注二論文(「日持伝の史的考察―謎の海外伝道

者)において、日持伝の出立の地は、松前説と日達に代表される鎮西説に両分されていたとする。『鷹峰群譚』の問題については別稿で記したい。

(34) 前掲注十九論文。

(35) 義経生存説に関わる文献を多く収録していた岩崎克己『義経入夷渡満説書誌』(一九三三、岩崎克己)にも『別頭統紀』『鷹峰群譚』は収録されていない。

(おこのぎとしあき 立正大学非常勤講師)